

## ある老婦人の死

21世紀を前に、くも膜下出血で倒れ、意識がなくなった。さいわい、緊急手術が成功し、意識ももどり、あとは普通に生活できるように歩行練習やこまごまとした手の動作が円滑にできるようになれば、後遺症もなくなるし、前途は明るかった。暗転したのは、その頃自他ともに一流と考えられていた××センターに入院してからである。早く言えば、「医療ミス」の連続で、ガタガタになってしまったのである。大きいのは2回だが、こまかいのも挙げていくと、片手では数え切れない、という。

こまかいところまで、今は覚えていないのだが、痰の吸引のために気管に入れておいたチューブに、あろうことか本来血管に直接入れるべき点滴をつないでしまったのである。あまりに咳込むので、そばに付いていた家族（と言っても、看護学院の教官までしていた看護婦）が気付き、あわてて抜いていろいろ手を尽くし、なんとか回復した。つなぎ間違いやすいチューブではない。どうやって柄のないところに無理矢理すげたのか理解に苦しむようなつなぎ方であった。いわば、断面が三角の管に、四角の管をつないだようなもので、肺に直接点滴したようなもの。あとで見れば、ミスをした本人も容易に気付くだろう、と思われる初歩的どころか、素人が見ても絶対につながないようなチューブである。……同じ病棟の看護婦が、「医療ミスというのは、全く違う世界の遠いところで発生するものと思っていました。まさか自分のいる病棟で起こるなんて考えたこともありませんでした。」と述懐した。……ところが、ミスをした本人ではないが、詰所においては、「ミスは仕方ない。この病棟が忙しすぎるから」と調査に来た副部長に食ってかかったバカがいるのである。では、多忙すぎるといえるが、他の病棟についてどれほど知っているのか？ もっと忙しい病棟はあるし、そういうふうに住直るなら、配置転換もあるし、辞めればすむことではないか。

そういう反省も罪悪感もない態度が、小さなミスの繰り返しになり、その姿勢が2つ目の大きな、致命的なミスにつながっていく。

のちの話になるが、この副部長が全員から聞き取り調査をしたところ、使命感も責任感も今後の抱負や方針についても、きわめて杜撰で、知的好奇心にも乏しく、考えられないほど低いプロ意識しかなかった、と言う。結局この病棟は封鎖されて消滅してしまった。

2つ目の大きなミスは、喘息発作である。もともと軽い喘息発作が時々あったのだが、ある夜、家族が「気になるので泊まったらいけませんか？」と言ったところ、婦長が、「その必要はありませんネ」と邪険に反応し、家に帰らせた。そして2時間後、緊急の電話が家族のもとに入り、意識がなく、生命の危険があるのですぐに来院せよ、という連絡である。家族からみれば、「僅か2時間、目を離した」隙に致命的な処置の遅れになったのである。当直医が3人もいるのに、まともな報告ができないから、すべての処置が後手にま

わったのであり、患者の容態も把握できない婦長の無能さにも呆れてしまった。こののち、ついに歩行することができなくなり、また発語障害も残るし、笑顔が失われ、喜怒哀楽も表せなくなった。……内部（看護部）では、このときに無能婦長が数時間単位で胃潰瘍になったことが話題になる程度の意識であつたらしい。

斯様に、一流病院といっても、大したものではない。要は個人の能力、レベルの問題であり、他の病棟でもかなりひどいものがある。たとえば、小生が当直の時、家族が主治医を呼んでほしい、と再三再四要請したにもかかわらず、「様子をみます」とだけ言って、詰所に帰る。あんまりうるさいから当直の小生を呼んだ。行ってみると、すでに呼吸がとまっている。どこかで聞いたような話であるが、事実である。……それでも、自分の判断ミスのみとめなかつた。見るからにレベルの低そうな看護婦だったし、その他の連中も似たり寄ったりである。病棟全体のプロ意識の低下がある。緊張感のなさが露骨に現れている。まだまだいくらでもあるが、ここではこれ以上触れない。

救急医療については、別に書く。

ひとつの例として挙げれば、先の病棟に 20 数名の看護婦がいるが、辛うじて合格点をやれるのは、2~3人だという。

そして 14 年間、1 日も欠かさず昼夜を問わず介護してきたが、つい先日、眠るがごとく、永眠された。享年 84 歳である。

ひとつのミスが、その人の生涯にわたって苦痛を与え続け、患者のみならず、否応なしに家族も巻き込んでしまうことを考えれば、たとえ一瞬のミスであっても、禍根を残す。医療従事者の責任はきわめて重いものである。

小生、よく言うのであるが、「プライドだけは一流で、やってることはアマチュア以下。」勤務中は、緊張を強いられるのはやむを得ない。そういう仕事を選んだのだから。ただ、ずっと緊張しっぱなしというのは、事実上不可能である。それをうまく緩和するのも仕事の一環であり、能力が問われるところである。